

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	下 村 忠 賛
論文審査担当者 主 査 リハビリテーション医学 辻 哲 也 内科学 中 原 仁 衛生学公衆衛生学 岡 村 智 教 病院薬剤学 大 谷 壽 一 学力確認担当者：金井 隆典 審査委員長：中原 仁 試問日：2025年 1月16日				
(論 文 審 査 の 要 旨)				
論文題名：Impacts of increases and decreases of drugs on rehabilitation outcomes of subacute stroke patients (亜急性期脳卒中患者における薬剤の増減のリハビリテーション治療に対する影響)				
ポリファーマシーや薬剤の増減が亜急性期脳卒中患者のリハビリテーション（以下、リハ）治療に与える影響については十分に解明されていない。本研究では、回復期リハ病棟の脳卒中患者を対象に、入退院時の薬剤数および追加・中止薬剤数等の因子と退院時の日常生活動作（Activities of Daily Living: ADL）との関係を調べた。結果、入院時の薬剤数や追加薬剤数が退院時のADLと負の関連を持つことを明らかにした。 審査では、研究の新規性が問われ、薬剤の増減に焦点を当てた点が評価されたと回答した。脳卒中の病型による違いについて問われ、ポリファーマシー群で脳梗塞が多く、非ポリファーマシー群で脳出血が多かったと回答した。脳梗塞の細分類についての質問に対し、必要な薬剤が異なるため、投薬状況に差が生じ得ると回答した。入院中の投薬方法について問われ、担当医の裁量によるものであると回答した。病院間での処方の違いが本研究の結果を通じて医師への啓発につながるかと問われ、本結果を受けて医師が多剤の処方に慎重になる可能性があるかと回答した。一般的な慢性期のポリファーマシーと入院中との違いについて問われ、入院中は必要に応じて処方されており、慢性期とは異なる可能性があるかと回答した。研究の目的は医学的側面か社会医学的側面かを問われ、研究を構想した段階では後者であったが、結果からは前者も考え得ると回答した。統計解析の手順について問われ、退院時Functional Independence Measure（FIM）合計点と各要因との相関関係を調べ、独立変数を選定し退院時FIM合計点を従属変数としてステップワイズ法で重回帰分析を行ったと回答した。FIMと各要因の多重共線性については、Variance Inflation Factor（VIF）により確認したと回答した。偶然に因子が抽出された可能性については、リハ効果の指標であるFIM-effectivenessを従属変数としても同様の結果が得られたことから結果は妥当であったと考えるが、今後、強制投入法も検討すると回答した。ADLと増薬との因果関係を明らかにする方法について問われ、傾向スコアマッチング等の手法を用いて、入院時の条件が揃った患者群を用い、増薬のタイミングとFIM変化を比較すると回答した。 脳卒中の病型については、今後病型を分けて検討すると回答した。嚥下障害患者の除外について問われ、嚥下障害は内服を制限する可能性があり、今後除外を検討すると回答した。予期せぬ転帰について問われ、転院を要するような病状の悪化があると回答した。増薬とADL低下の因果関係については、投薬を要する状態の悪化によりADLが低下した可能性があるかと回答した。降圧薬や糖尿病治療薬の追加について問われ、いずれもリハに影響を与える可能性がある状態変化により薬剤の変更が行われた可能性があるかと回答した。今後の展望について問われ、減薬がADLへ与える影響について検討したいと回答した。 以上、本研究には今後検討すべき課題が残されているものの、亜急性期脳卒中患者における薬の増減とリハ治療との関係を明らかにした点で、有意義な研究であると評価された。				